
ヒーローメーカー！

水無月 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローメーカー！

【Zコード】

Z6189Z

【作者名】

水無月一

【あらすじ】

宇宙で唯一の星立であり、様々な種族が混在する学校、桜花繚乱高校。そこに合格して通うことになった1人の少年とその仲間たちの戦いと学園生活を紡ぐ運命の物語。彼らの進む道の先にあるものは明るい未来か、それとも黒い絶望か。

笑いと悲しみの学園ファンタジーにするつもりです。

黒鏡色の皿を持つ少年（前書き）

初投稿です。至らぬ点があるかもしれません、優しく見守ってください。よろしくお願いします。

黒鋼色の目を持つ少年

星立桜花繚乱高校。通称サクラ高。

銀河を巻き込んだ大戦を終結させて全ての星に他の星と平和条約と不可侵条約を締結させた、辺境の星に住んでいる学校にも行つていないような小さな子供でも知つていて伝説の英雄とその仲間たちが建立に尽力したと語り継がれる、皇立でも帝立でも法立でもない銀河で唯一の星立高校である。

伝説の英雄の建設総指揮、有名設計者のデザイン作成、技術屋集団の技術投入などフロウラル星にある力を全て注ぎ込んで建てられた学校だから、人気の高さによる入学の倍率の高さ、他には見られない前衛的な学校の景観、近代的な設備その他諸々の特長で名が通つていてる。

中でも異星間交流と英雄の輩出理念の一いつが特に顕著だ。

サクラ高は平和の象徴を体現する一環として、普通の学校よりも積極的に他の星からの入学や転学を推進している。その為、サクラ高があるゲッケイジュ皇国には様々な種族がゆつたりと闊歩している。

種族や個体によつて髪や皮膚の色はまちまちなので、もし鳥瞰で見ることができたら国はカラフルに彩られていると分かるだろう。それを実際に見れるのはごく一部の状況に置かれている人間だけであるが。

サクラ高では、どの学校でも当たり前として習う数学や語学から選ばれし者しか学ぶことがない農学や帝王学、さらには魔法学までを入学時から必修科目として、長所を伸ばしたり短所を克服したりする為の分野を一年目から選択科目として学ぶことができる。

こんな特殊な学習体制を敷かれるのも、全ては人の上に立つ器を持つ人間の才能を発掘、養成して学界、政界、芸能界などあらゆる業界に英雄やスターを送り出す『英雄錬成』のスローガンを果たす

ためだ。

こうなつたのも当然と言えば当然である。何せ英雄が建てた学校なのだから。

ちなみに英雄を大量に生産するから安いと考えられているからだろう、サクラ高では入学金、寮費、学費が一切かからない。

今、そんな尋常とは決して思えない学校の校門前に、涼しい顔をしてはいるが喜びや期待といった良い感情を黒色の鋭い目に湛えた一人の少年が佇んでいる。

少年もまた、サクラ高に通うことになつた学生の一人である。

この学校に通う為に少年はサクラ高の受験生の数倍という計り知ることは到底無理なほどの努力をしてきた。

それもそのはず、少年は特徴を探すのに骨を折らされる種族、二ンベンであるからだ。

二ンベン

あらゆる種族の特徴、能力を全て平均化したような種族。他種族の基礎となっている。銀河一個体数の多い種族もある。

優れた面や飛び抜けて目立つた特徴がないと進級や卒業することはあるが、入学もままならないようなサクラ高は二ンベンからしたら雲の上の存在である。

そんな考えがはびこっていても、少年は二ンベンとして数少ない合格者の一人となつたのだ。

サクラ高では人柄や個性を重要視しているので面接の配点が他校よりも遥かに高い。

それでも少年は、筆記試験では賢良種族が、実技試験の『受験生全員でバトルロイヤル』では身体能力が高い種族または戦闘種族が好成績を収めている中で大健闘していた。

何故少年がここまで頑張るのかというと、英雄に憧れていたりなりたいと思っていたからではない。ただ単に、学費と諸経費

が無料だからと大きく夢に近付ける気がしたからである。後者はこの入学試験の難易度や実技における周りのレベルの高さ、面接の質問の内容の深さからそれは予想から確信に変わっていた。

そんなことを感じていた上に合格が決まつたから、クールな性格をしている少年でも喜びを抑えられずに制服を着て学生寮を飛び出して下見に来たという訳だ。

しかし、その行動も空振りに終わった。まだ春休みであつたから校門は閉まつていて、校内には人がいる気配がしなかつたのだ。代わりに少しがびしそうにその場を去る少年の後ろ姿があつた。

だが、少年がめげることはなかつた。まだ他にも楽しみがあつたからだ。

前述した通り、ゲッケイジュ皇国は多くの種族を抱えている。いわゆる『種族のるつぼ』である。その為、この国は宇宙に存在する星の数と同じだけの文明を折衷しており、物質文化や精神文化などを独自のベクトルに発展させていく。それは食文化にも該当する。要するに、この国にはおいしい食べ物で溢れかえっているのだ。

いつもは育ての親の家でご飯を食べているから外食する機会がほとんどなかつた。なので、少年は今日の昼食を楽しみにしていたのである。

元々貧乏な家で育つたから小遣いは雀の涙ほどしかないが、物欲は全くと言つていよいよどなかつたから学生としては結構な額を貯めることができたのでここでいくらか使おうと思つていた。

サクラ高の周囲は雑貨屋や本屋、ファッショントップなどを始めた商店街と学生向けに大量に食べることができる料理を安く提供するフードコートでひしめき合つてゐる。いつなつたのも、フロウラル星がゲッケイジュ皇国を学園国家にするという政策を施行したからである。

そういう訳で、この辺りには質のいい店がいっぱいある。そんなことを考えながら、少年は横道からアーケードに入つて散策を始めた。

せつかくということで、少年はフードコートではなく商店街にあるレストランか飯屋で昼食を摂ろうと思っていた。

案の定そこには知識でしか知らないようなものが多く売られていで、少年にとつてそこは新鮮な印象を与えてくれる面白い空間だった。

そのエリアは比較的小規模の商店街ではあるが、いろんな星から集めて愛玩できるようにしたペットショップの動物、まだ読んだことがないような異文化の学術書、おそらくは工業の発達した星で作られたのであるう高性能テレビや災害時用ラジオといった品々が少年の目に飛び込んでは大いに心を踊らせた。しかし、昼食を食べるという目的は忘れないでいた。

少し歩いていると、首飾りや民族衣装などを取り扱っている装飾店と先刻からどう見ても堅気とは思えない人達が出入りしているギヤンブル場らしき場所との間に、木造建築で存在感たつぱりの小ぢんまりとした飯屋がぽつんと置かれているのを見つけた。

その飯屋の第一印象は『年季が入った老舗料理店』であり、少年がそこに入る理由としては十分過ぎるものだった。

「『割烹店 豚珍甘』……」

少年は店の名前が書かれた看板を読んで迷いなく飯屋の引き戸を開けた。その瞬間、店内外の気圧差によつて正面からそよ風が吹き、少年の鼻腔にそれをくすぐるような甘い醤油の香りが広がつた。しばらく仁王立ちで香りを楽しんでから店内を見渡すと、開店休業よろしく人の気配は関係者と思われる一人ほどしか感じなかつた。何となくだが、少年は当たりを引いたと思つた。

「ラッシャイ！ 坊主、そんなトコで突つ立つてないで中に入りな！」

声をかけられた少年は店長らしき人物が動き回つてゐる展覧型の厨房の外側に設置されてゐるカウンターの席に着いた。

メニューが載つてゐるであらう冊子に手を伸ばして中を見てみると、そこには十項目ほどしか書かれてゐなかつた。

「だわりか、怠慢か、閃かなかつただけなのかと答えを見つけようと思案を巡らせたが、どれもおいしそうな名前だったのでそれ以上に疑問は断ち切つて適当に一つ注文することにした。

「豚の角煮定食」

「あいよ。ところで坊主、見ない顔だがサクラ高の生徒さんかい?」「今年から入学だ」

「そうかそうかそれはおめでとう。こいつはお祝いだ、飲みな」そう言つた店長は液体の入つたグラスを渡してきた。絶え間なく立つ泡によつて水面に作られた小山を見てそれはパフソーダであると判断した。

「パフソーダ

飲んだ後の清涼感にかけては右に出るものがないと言われる炭酸飲料。水面にできる泡の塊が白粉たたきみたいだから『パフ』ソーダと呼ばれている。

「ありがとう」

「水をどうぞ」

そんな素晴らしいものをもらつた直後、店内にいた従業員が水の入つたコップを渡してきた。

礼の一つを述べようと、少年は従業員の顔を見上げた。そして息を呑んだ。とても可愛い娘だつたからだ。

言つなればその少女は、ウサギやカナリア、ハムスターなどの小動物の愛らしさに割烹着と頭巾を着せたという表現に相応しかつた。少年は正直な感想を口にした。

「可愛いな」

その言葉が出てから数秒間、一人の間は沈黙で満ちた。

その沈黙を破る代わりに、少女は顔を真つ赤にして厨房の中に隠れるという行動を起こした。

すぐに少年は頭の中で、自分の思ったことを何でもしゃべつてしま

もう癖の所為で辱しめられた少女に小さく懺悔して、たつた一言の褒める言葉を聞いただけで全力で恥ずかしがる様子を大きく嘲笑した。

ひとしきり頭の中で笑つた後で少年は、何故自分はこの少女を笑うような下卑た性格なのかとふと疑問に思い、不意に自分の過去を思い出していた。それは学生としてはさみしいものだつた。

男女問わず誰からも良くて『一匹狼』、悪くて『無愛想』という印象を持たれていて、友人はあまりいなかつた。

周りから距離を置きつ置かれつの環境に身を置いていたから全てを達観視、客観視することができた。

だから少年は端から見れば笑えるもののみを笑うことができるのだという結論に達した。

合点が行つたところで、少年はパフソーダをストローでかき混ぜ始めた。そうしながら少年は自分を笑い、誰にも聞こえないように小さく呟いた。

「うせ同じだ。これから先も。

少年は感情の消えた無機質な目で渦を巻くパフソーダを眺めていると横から視線を感じた。何だろうと思つてその方向に顔を向けたら、先刻の少女が柱の陰から少年を窺つていた。

少女が何か話したげな雰囲気を醸し出していたので、することもないということで少年は手招きで少女を呼び寄せた。

すると少女は嬉しそうにトコトコと歩み寄つて近くの椅子に座つた。

少年は改めて少女の身体的特徴を上から下まで観察してみた。

露を含んでいると錯覚するほどの輝きを放つショートの青髪、くりくりとした紅眼、身長の割に大きなバスト、腰から足先までの逆台形をした脚線美など少女の持つパーツ全てが一級品だつた。

少女の見目は愛情を注がれるべきものというよりも、分け隔てな

く劣情を煽る危険なものというのが適当だった。少年はといつと、あまりそういうのに興味は持てなかつた。

「さつきの店長との会話を聞かせてもらつたよ。あたしはエクレアノ・ド・ラグーンって言つの。あたしも今年から入学だからよろしくね」

「どうか

「坊主の呴いた通り、可愛い娘だろ?」

店長が口を挟みながら、少年の注文した定食を乗せた御盆をカウンター越しに渡した。

「なんなら一人共付き合つたらどうだ? 坊主の見た目も悪くないからな」

「て、店長!」

「ガツハツハ!」

豪快に笑う店長とあたふたと慌てるエクレアノのことは既に眼中になく、少年の興味は既に豚の角煮定食に向いていた。

脂が反射してキラキラと光る角煮、良質な素材を使つていうことが匂いで分かる味噌汁、御盆の中を彩るニンジンや白菜のお新香、ホクホクと暖かそうな湯気を立てる銀シャリリが少年の嗅覚と視覚を刺激した。

すぐに少年は御碗を片手に持つておかずを突つつきながら食べようとした。

「ゴホン、あの、名前を聞いてもいい?」

「むん、俺か? 俺は」

少年が名乗るのとしたら、店の引き戸が勢い良く開かれる音がした。

店にいる三人がその方向を見ると、そこには手と膝を地面につけながら店内に入つてくる男がいた。

「邪魔するぜえ」

その男は、腕や腹は丸太のように太くて立ち上ると2・5メートルを優に越すヤマカンムリだった。

ヤマカンムリ

体の大きさと怪力が特徴の種族。敏捷性の低さが弱点。

「ショバ代をもらひに来たぜえ」

「オニールファミリーの奴か。しつこいもんだな。もつこいはお前たちのシマじやねえ。帰りな」

「そとは行かねえなあ。オラ、さつきの博打の負けと借金でスッカラカンなのだ。金を寄越しなあ」

「帰れ。三度目はないぞ」

少年が話を聞く限りでは、ヤマカンムリの男は隣の賭博場で身ぐるみを剥がされたようだ。少年からしたら自業自得の一喝だ。

男は店内をキヨロキヨロと見回して、エクレアノと皿が合つた。

「この女、花街に売れば高くつきそうだなあ」

ヤマカンムリの男はエクレアノに近付いて、その細いウエストをぞんざいに掴み上げた。

「は、放して！」

そのまま店を出て行こうとする男を、厨房を飛び出した店長が包丁を持つて追いかけた。

「クレアを放しやがれ！」

「うるさいぞお」

皿一杯伸ばした手に握られた包丁が男の体に触れる前に、圧倒的なリーチを誇る男の腕の先にある掌のビンタが振り向きざまに店長の体に当たった。

モロにそれを食らった店長はカウンターに向かって一直線に吹っ飛び、後頭部を強打して、ガシャンと何かが落ちる音がした中で数回けいれんした後に気絶した。

手出しする気もなく傍観を決め込んでいた少年はエクレアノと店長を哀れみながらも、あわよくばタダ食いをしてやろうと画策し、

定食に箸をつけようと正面を向いた。

食べることは叶わなかつた。店長がカウンターにぶつかつた時の衝撃で御盆が下に落ちていた。少年はてっきり厨房内の調理器具が落ちたのだと勘違いしたのだ。

少年は激怒した。エクレアノを誘拐したことでも店長を気絶させたことでもなく、自分が食べようとしていたものを粗末に扱われたことに。

少年は冷たい怒りの表情を浮かべて男を追いかけた。
玄関の引き戸を蹴破つて左右を確認すると、男は隣の賭博場のドアを開けて中に入ろうとしていたところだった。おそらくギャンブル場にいる胴元か金回りのいい同業者に売ろうとしているのだろう。幸い、小柄なエクレアノが懸命に暴れて抵抗していたおかげで少しの足止めができていた。

「おい待てウドの大木」

それが男の真後ろまで来た少年の第一声だつた。

当然、こんなことを言われた方としてはいい気分ではなかつただろつ、男は嫌悪の感情が剥き出しの顔を振り向かせた。

「誰がうどんの買い置きだつてえ？」

それが聞き間違いでも然り。嫌なものは嫌である。

「脳ミソは空つぽだけど耳クソは満タンか。世話ないな」「何だおめえ、やるつて言うのかあ？」

「殺るぞ。その前に、大切なものを返してもらひ

「はあ？ おめえ、何を

」

そこまで言われたところで少年は男の腹を駆け上がつて顎に鋭い膝蹴りを一閃した。

エクレアノを落としてから後ろに倒れた男を見ながら、少年は満足とも不満とも取れる深い鼻息を出した。

「あ、ありがと……」

少年はエクレアノの謝礼の言葉を意にも介さずに男の許にゅつくりと歩いて行つた。

「ぐつ、何しやがんだあ！」

上半身を起こしながら怒鳴る男。

「何回死にたい？」

そこに間髪を入れずに馬乗りして、胸ぐらを掴みながらドスを利かせる少年。

「ふざけんのも大概に

「何回死にたい？」

「ぶつ殺

「何回死にたい？」

身長175センチの少年が2・5メートル超の大男よりも立場が

上になつていることが分かるワンシーンである。

少年の視線から殺意を読み取った男は恐怖と危険を感じて、上からどかす為に手で振り払おうとした。

少年はそれよりも早く顔面に全力の前蹴りを当てる、店長がされたように後頭部を地面に打ちつけさせて失神させた。

諸悪の根源は倒した。しかし、失ったものは戻らない。ただ、この場合は定食一つであつて大したことではない。

しかし、昼食にありつけられないといつのは学生の身分では死活問題に匹敵することを少年は知つていた。

少年は鳴る腹の虫を押さえながら立ち上がり、フードコートまでの道を調べるためにポケットからサクラ高周辺の地図を取り出した。何故他の店に行かないのかといふと、理由は二つある。店に入るとなたうやむやになつて食べられないという悪い予感がしたからと『豚珍甘』と同等かそれ以上の当たりを引く自信がないからだ。

深いため息を吐いて、フードコートへ行こうと歩を進めていたら、
「ねえ、お腹減ってるんだつたらあたしが作ろうか?」
エクレアノが提案をしてきた。

「もちろんおごるわ。助けてくれたんだからそれぐらいはさせてもらうわよ」

そう言つて前に回り込んで、少年の俯き氣味の顔を覗き込んで愛

らしく笑った。

少年にとつては願つてもいないことだつた。

少ない小遣いを奮発して贅沢に使おうとしたが、少しも食べられなかつた。仕方なくフードコートで三文飯を食べようとしたら料理を作つてくれると来た。まさに天国から地獄からの天国だつた。

「頼めるか？」

「もちろん。期待してね」

「助かる。節約になるからな」

「いいのよそれぐらい。それに、あんなこと言われたの初めてだか

ら……」

「ん？」

「ああ、何でもないわ」

店内に入ると店長はまだ氣絶していたので、椅子を四つ並べてその上に寝かせてあげた。

少年はカウンター席に座つて、エクレアノは厨房内で割烹着を巻くつて調理態勢を取つた。

「そういえばまだ名前を聞いていなかつたわね

「そうだつたな。俺は

「

これは、一人の少年とその仲間たちが紡ぐ物語。

「クロガネ・クロヤマだ」

つらいことも楽しいことも悲しいことも嬉しいこともありますのが織り交ざつた運命の物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189z/>

ヒーローメーカー！

2011年12月20日19時51分発行